

日本学術振興会 R3～R7 年度科学研究費補助金・基盤研究A

「南縁・東縁地域における郡県都市の変容からみた“漢帝国の遺産”の東アジア史的意義」

国際学術シンポジウムII

東アジア都市文明の考古学研究

総合コメント

谷豊信（東京国立博物館客員研究員）

「東アジア都市文明の考古学研究」と題する二日間にわたった本シンポジウムでは、中国・ベトナム・日本の研究者から、中国の漢王朝から唐王朝にかけての時期の、中国・ベトナムそして日本の、都市遺跡とこの時期に特徴的な手工業製品に関する最新の研究成果が、インターネットを通じて報告された。インターネットを介して日本の参加者との質疑応答も行われ、研究交流において大きな成果が得られた。扱われた時代・地域・内容は多岐にわたっており、その全内容を詳細に理解することは浅学の評者には不可能であるが、評者なりに理解しえた範囲でコメントを加えることにより、本シンポジウムの意義を確認することにした。

1. 漢唐洛陽都城の空間構造とその歴史変遷

銭国祥（中国社会科学院考古研究所）

河南省洛陽市には、洛陽城と呼ばれる都城跡が二箇所ある。後漢から北魏にいたる諸王朝の首都であった漢魏洛陽城と隋唐王朝の第二の都市でしばしば首都機能も果たした隋唐洛陽城である。本報告は、これまで長きにわたり二つの洛陽城の発掘調査に従事してこられた銭国祥氏による総括であり注目される。

報告では、二つの洛陽城について、発掘調査の知見と文献記載を総合した復元案が紹介された。漢魏洛陽城では、後漢から三国魏を経て北魏の時代にかけて、南北中軸線がしだいに明確になったことを明らかにし、隋唐洛陽城で川が城内を東西に貫くという独特の構造となったのは、物資の輸送、住民の生活そして景観を保証するためのとの説明があった。

日本側参加者からは文献記載を利用するには慎重な検討を要するとの指摘があり、一方、報告者からは文献記載と考古学所見が合わない例もあるとの説明もあり、結論はでなかったものの国際シンポジウムの機会を生かした興味深いやりとりであると感じられた。

2. 十六国・北朝長安城の発掘調査と瓦磚遺物の考察

劉振東（中国社会科学院考古研究所）

前漢の首都長安城は、洛陽を都とした後漢・三国魏・西晋の時代にも都市として存続し、その後の、十六国と北朝の時期において再び王朝の首都となった。しかしながら、後漢時代以降の長安城については、これまで不明の部分が多かった。

本報告では、長安城の多くの城門が後漢時代以降使用されなくなったのに対し、一部の門は継続して使用されたことが発掘調査で確認されたこと、また城内で仏像も発見されたことなどが紹介された。十六国・北朝時代の瓦の研究も紹介された。

中国の南北に二つの王朝が対立した南北朝時代を終わらせたのは北朝であるが、北朝の首都について従来の知識は乏しかった。長安城の最近の成果は、北朝の歴史の研究を大きく進めるものと期待される。

3. 高句麗国内城の発掘調査とその関連研究

王飛峰（中国社会科学院考古研究所）

西暦 427 年に高句麗は平壤に遷都するが、それ以前の首都が、吉林省集安にあった。本報告は 1980 年代以降精力的に進められた考古学的調査を回顧する。

集安の高句麗遺跡に対する日中の研究者の理解は大きく異なっている。たとえば、中国の研究者は、集安発見の高句麗の遺跡・遺物はほとんどが平壤遷都以前のもので解するのにに対し、日本の研究者は平壤遷都以後の遺跡・遺物も少なくないと考えている。中国の研究者の理解が正しければ、集安の仏教関係の遺物は、中国の他の地域に比べ非常に早い時期に登場していることになるのであるが、それは不自然であると多くの日本の研究者は考えている。

今回の報告では、遺跡と遺物の年代観は従来の中国の研究者のそれを踏襲するものであった。日本の参加者からは、遺物の年代観に関する質問がだされたが、従来の理解を妥当とする報告者とは議論がかみ合わない観があった。ただ、そうしたやりとりが直接されたのは重要であり、今後、さらに踏み込んだ議論がなされることを期待する次第である。

4. シベリア・タシバ城址：匈奴王郅支の堅崑国都説

潘玲（西北大学文化遺産学院 教授）・サレンビリゲ（内蒙古博物院 研究員）

ロシアの南シベリア地方とモンゴル国の領内では、文字瓦当・青銅鏡など中国系の遺物を出土する遺跡が存在し、近年は、ロシア・モンゴル・中国・日本の研究者による調査研究が進められている。本報告はそうした遺跡の一つである南シベリアのタシバ城址を取り上げている。

従来、中国的と指摘される遺物が存することは知られていたが、そうした遺物の編年研究は進んでいなかった。本報告では、中国考古学の編年研究の成果を幅広く応用して、タシバ城址の出土遺物の年代が前漢後期に平行すると考察した。また城の構造が、漢長安城と類似しており、かつ未完成であると思われると指摘した。こうしたことから報告者は、タシバ城址が、中国側の文献資料に郅支単于と記録された匈奴の有力貴族が短期間、都とした遺跡と推定した。

タシバ城址が、郅支単于の都と断定する直接的証拠は乏しいが、前漢後期に漢王朝に帰順した匈奴の貴族に関係する遺跡である可能性は高いと感じられた。文献資料には、匈奴貴族

が漢に帰順したとの記載があるだけで、彼らの活動や生活の実態はほとんど知られていない。今後の研究の進展を大いに期待したい。

5. 農牧境界都市「北庭都護府」の調査発見と考古学研究

郭物（中国社会科学院考古所）

唐王朝は、現在の新疆ウイグル自治区を統治するため、拠点を築いた。北庭都護府はその一つであり、唐が撤退した後も元時代にいたるまで重要都市として機能した。

報告では、2016年以降、精力的に進められている考古学的調査の概要が紹介された。調査はまず城門・街道と水道など、都市の骨格をなす部分から始め、遺跡が広大であるため、ボーリング調査による概要の把握と重要遺構の発掘調査を平行して進めている。

門や仏教遺構などが発掘されて、蓮華文の瓦や磚（タイル）が発見されていることも重要であるが、生活を支える水路の解明に力が注がれていることは注目に値する。中国の発掘といえば、壮大な遺構や華やかな出土遺物という印象があるが、最近は当時の生活にも注意が払われるようになってきている。とくに乾燥地帯にあるこの遺跡では、水の管理が都市の盛衰の鍵の一つと思われ、今後の進展が期待される。

6. ベトナム漢代城址の発掘調査と出土文字瓦の考察

Đặng Hồng Sơn（ハノイ大学）

漢帝国の支配領域では、漢式瓦とも呼ばれる、形態と紋様に共通する部分が多い瓦が流行した。漢王朝の支配下にあったベトナム北部でも、漢式瓦が用いられていたことは知られていたが、詳しい研究は行われていなかった。本報告は、多くの日本の研究者が初めて接した、本格的漢式瓦の研究成果であり、古代東アジアの瓦を研究してきた評者には、得るところが極めて大であった。

報告では、ベトナムのハイズオン省に位置するホアクック城址出土の瓦の形状と紋様を紹介している。中国での瓦研究は、瓦の紋様に偏重する傾向があるが、本報告は形態や使用法まで考察しており、示唆に富む。瓦は古代東アジアの文化を研究する上で重要な資料の一つであるが、従来空白であったベトナムの資料も加わることになった。

7. ルイロウ城と紀元1～10世紀のベトナム陶磁器

ブイ・ミン・トリ（ベトナム社会科学院都城研究所（IICS））

本報告は、ベトナム出土の陶磁器を概観する。中国王朝の支配下にあった1～10世紀のベトナムの陶磁器は、従来は中国陶磁史のなかで中国南方の陶磁器というくくりのなかで扱われており、この地域で生産された陶磁器の独自性を探るという観点はほとんど無かったといっても過言ではない。こうしたなかで、本報告では、ベトナム出土の陶磁器を考察し、それが現在の中国から搬入されたものばかりではなく、ベトナムで生産されたものもあることを明らかにし、さらに中国出土の陶磁器にもベトナム製が含まれている可能性に言及

した。

報告を聞く限りでは、中国出土品とベトナム出土品のさらに詳細な比較が必要であるとの印象をもったが、従来軽視されてきた感があるベトナム製陶磁器の地域的特色には今後大いに注意を払わねばならないと感じた。

8. 南縁拠点都市ルイロウ城の発掘から甦った「交趾」の実像

黄 晓芬（日本・東亜大学）

黄晓芬氏は2012年以来、ベトナム北部において漢代の交趾郡治・嬴隴県の候補地の一つであるルイロウ遺跡の調査を日越共同で続けており、本報告は調査の最新成果を盛り込んだ、現状での総括である。

これまでの調査によれば、遺構はⅠ期（漢）、Ⅱ期（三国～東晋）、Ⅲ期（南朝）、Ⅳ期（隋唐宋元）の四期に区分される。Ⅰ期に壕を巡らした都市が形成され、Ⅱ期になると土塁が巡らされ、Ⅲ期にはその外側にも城壁を築いて二重城壁をもったが、Ⅳ期には規模が縮小した。出土した瓦磚・陶磁器には、中国系のものであれば、ベトナム独立王朝時代のものもあり、この地域の歴史の変遷を示す材料を学界に提出した。

漢代の交趾郡は、漢王朝のベトナム支配の拠点であり、その所在地がどこか研究者が注目しているところである。報告を聞く限りでは、Ⅱ期・Ⅲ期においてこの城が重要な都市であったことは疑いない。漢時代であるⅠ期の遺構はまだごく一部を発掘したに過ぎない状況であり、今後の調査が大いに期待される。

9. 3D考古学からみた石家河遺跡群の人と地の関係模式

劉建国（中国社会科学院考古研究所）

石家河遺跡は、長江が流れる中国湖北省に位置する城壁と壕で囲まれた大規模な新石器時代の遺跡で、中国における古代国家の形成過程を研究するうえで極めて重要な遺跡である。この地域は古来、水不足と洪水とに悩まされており、この地域の新石器時代集落がもつ城壁と壕は、軍事的な防御施設というより、稲作に必要な水を確保し、洪水から集落を守る機能が重要であったと想定されている。

報告者は、新石器時代の石家河遺跡の住民が、水をどのように管理していたか解明するため、デジタル標高図を作成し、地形と水の流れを分析した。そして古代人が高台と溝という地形の特色を生かし、高台には土をもって住居をつくり、低地には池と水田を作り、雨期に池に水を蓄えて、乾期には水田を灌漑していたものと推定した。

精密なデジタル標高図から、水の流れを分析し、さらには人により改変された地形を読み取る研究は、新しい試みであり注目される。大規模な都市遺跡をすべて発掘することは困難であり、発掘によらずして都市遺跡をとりまく環境を研究しようとする本報告は、日本の研究者にも刺激を与えるものである。

10. 前漢期五銖銭の鑄造遺跡に関する調査と研究

徐龍国（中国社会科学院考古研究所）

漢時代の中国では貨幣が広く用いられた。五銖銭という銅貨が前 118 年から後 1 世紀初頭まで 280 億枚発行されたと記録されている。これだけ大量の銅貨を発行しえた生産体制と鑄造技術の解明を目指して、以前から研究が進められてきた。

本報告は、前漢の首都である陝西省西安市の長安城内外で近年調査された銭の鑄造遺跡数カ所の概要を紹介し、出土した文字資料から銭の鑄造を担当した官署を明らかにし、あわせて出土した鑄型などから大量生産をめざした当時の銭の生産技術の変遷を説明した。

文献にはあいまいな記録しかなかった生産体制が明らかになり、また鑄造技術の変遷が明確に示されたことは、多くの研究者の期待に応えるものである。また発見された鑄型のなかに正規のもののほか、非正規の、いわば偽金というべきものの鑄型もあったとする指摘は興味深く、今後さらなる検討を要するものと思われた。

11. 鄴城発掘で検出した手工業遺跡とその遺物の考古学研究

朱岩石（中国社会科学院考古研究所）

鄴城は河北省と河南省にまたがる古代都市遺跡で、三国時代から十六国・北朝時代の諸王朝の都ないし重要拠点であった。漢時代および隋唐時代の都城に比べ、調査が遅れていた感があったが、近年、本格的な発掘調査が続けられ、しだいに詳細が明らかになりつつある。

本報告は鄴城内外で発掘された手工業遺跡、とくに陶磁器を生産した窯跡に焦点を置く。後漢末から十六国時代の窯では瓦塼などの建築部材や日用の土器が出土し、北朝時代の窯も同様であったが、高嶺土（カオリン）を胎土とする低温鉛釉陶器も含まれていた。これらは次の隋唐時代に華北地域で発展する本格的な白磁や唐三彩の魁とみることができると結論づける。

本報告は、まだ解明が進んでいない十六国時代の瓦塼や日本でも関心が高い北朝における磁器生産の問題解明にむけて新たな資料を提出するもので、注目される。

12. 日本における奈良・平安期の施釉陶器生産

高橋照彦（大阪大学）

日本において施釉陶器の生産が本格化するのは 7 世紀中頃からである。奈良時代、8 世紀には奈良三彩とよばれる多色の釉を施した陶器が作られ、平安時代になると緑釉単彩の鉛釉陶器、高火度の灰釉陶器が作られるようになる。

本報告は、奈良・平安期に生産された鉛釉陶器の展開を概観する。日本における鉛釉陶器は、朝鮮半島から伝わったものと考えられるが、7 世紀にいたってようやく国内生産が本格化するのには日本の生産者や受容者のありようが重要な要素であったためとする。また奈良三彩の技術は、遣唐使の随員として派遣された技術工人によって唐から移転したものとみられるが、明器という風習は受容されず、形態や装飾技法も唐三彩を忠実に再現したものではな

かった。中国風の施釉陶器愛好は10世紀にも継続するが、しだいに無釉陶器への関心が高まる。

日本など、中国周辺の地域では、中国の文化と技術にあこがれる一方、必ずしも忠実に模倣せず独自の文化を発展させてきた。現在、古代の中国と日本の陶磁器の様相はかなり詳しくわかるようになっており、こうした細かい対比研究により、今後さらなる成果が期待できる。

13. 南京古都建康城から出土した六朝陶磁器の編年研究

賀雲翱（南京大学考古文物系）・楊平平（南京市考古研究院）

中国江蘇省の南京市は、3世紀から6世紀まで、中国南部の政治・経済・文化の中心地であった。この時期に、この地域で、世界に先駆けて磁器生産が発達した。この時代の磁器の優品は墓の副葬品として出土することが多いが、この地域の墓は年号を記した磚で構築されることが多く、副葬された磁器の年代を正確に知ることができる。そのため、こうした築造年代が明らかな墓の出土品が、磁器研究の基礎となっている。近年の都市開発に伴い、南京市一帯では、年代が明らかな磁器の資料が激増している。

本報告は、あらたな出土資料を紹介し、磁器の編年研究をあらたな段階に高めたものであり、正式の出版物として発表されることを切望する内容であった。

以上、本シンポジウムでの報告内容を簡単にまとめ、可能な範囲で評者の感想を記してみた。まことに充実した内容であり、参加者が得たものはきわめて多かった。発表していただいた中国・ベトナム・日本の研究者に感謝する。

内容もさることながら、本シンポジウムで評者が注目したのは、シンポジウムを有益なものとするために、極めて周到な準備がなされていたことである。本シンポジウム開催の直前ではあったが、日本語と中国語の詳細な発表論文が配布され、資料をみながら発表を聞くことができた。発表の多くは事前に録画されており、同時通訳形式の翻訳も事前の十分な準備のうえに行われた。ベトナム語の発表は録画ではなく「実況」であったが、ベトナムにおいてベトナム語から中国語に翻訳され、日本において中国語から日本語に通訳するという困難な作業がおおむね順調に進められたことはみごとであった。さまざまな準備によって、短時間になされた多数の濃密な報告を参加者が理解することも容易であり、質疑応答も有益なものとなった。日中の学术交流の催しに何度か携わることがある評者としては、その順調な進行は驚くべきものであった。インターネットを利用した国際シンポジウム運営の模範例をみた思いである。関係者の事前な十分な準備に心から敬意を表する次第である。